
戦士の一生

Myzho

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦士の一生

【Nコード】

N3084I

【作者名】

Myzho

【あらすじ】

用意された道をただ歩いていけばいいだけの楽な人生。そのことを疑問に思ったことなんてなかった。自分の頭で考えることが何になる？ それなのに、あいつときたら・・・。

大人になった今でも、時々思い出す。

あいつ……。

13歳のころ、寮で同じ部屋だったキリヤのことを。

* * *

キリヤとぼくは、特に仲がいいというわけじゃなかった。たまに廊下ですれ違ったりするから、顔だけは知ってるというかんじだ。

ぼくがキリヤと知り合ったのは13歳のとき。寮で、相部屋になったのがきっかけだった。

そして、そのときのキリヤはまだ、どこにでもいるごく普通の少年だった。変わりはじめたのは、ぼくたちが相部屋になって少し経ったところだ。

ある日、キリヤが難しい顔をして部屋に入ってきた。何かがあったと察しがついたぼくは、声をかけた。

「どうかしたの」

「いないんだよ」

キリヤの声はとがっていた。

「だれが？」

「テッペイ。おれの親友。借りた本、返そうと思ってたのに……」

「ああ」

ぼくは窓の外を見やった。すぐ目の前を、薄い雲がゆるゆると流れてゆく。

「？ テキシヨ？ されたんだろ。クラス替えがあつたもんね」

そう言つと、キリヤがものすごい顔でぼくをにらんできた。あまりの形相に、ぼくは気圧けおされてしまった。

「……なに怒ってんだよ。珍しいことでもなんでもないじゃないか……」

クラス替えは半年に一度おこなわれる。それは、生徒たちを？適材適所？にふるい分けるためだ。

たとえば、数学が得意なやつは理数フロアに。手先が器用なやつは工芸フロア……といったふうに。

だから、ぼくたちはそれなりに勉強するけれど、？上のほうのひとたち？がぼくらの成績を見てぼくらの能力に見合った道へと導いてくれるから、どつかの後進国みたいな『受験勉強』とか『受験戦争』というものに煩^{わづ}わされることもない。

そんなわけだから、クラス替えのあと、今まで隣にいたやつがいつのまにか姿を消している……なんてことは珍しいことじゃない。能力別に、別のフロアに移るのだ。

よくある、あたりまえのことなんだ。

それなのに、キリヤはなにを怒っているんだろう。

キリヤが難しい顔でつぶやく。

「テッペイは音楽を勉強したがつてた」

「でも、好きだからって、能力が高いと決まってるわけじゃないだろ」

キリヤの甘ったれた言葉は、ぼくをムカつかせるのに充分だった。ぼくは絵を描くのが好きだ。だけど上手くない。くやしいけれど才能がなかった、能力を認められなかったんだ。

だから今、この？理数フロア？にいる。ぼくの数学の能力値はほかの学科より高かったからだ。

ぼくたちの住む国を繁栄させるためには、ぼくたち国民が安心して暮らすためには、この方法が一番いいんだ。このシステムに変えてから、自殺者も、仕事にありつけない者も、格段に少なくなつたと聞いた。それに比べたら絵を描くなんてこと、趣味でやればいいだけのハナシだ。

誰だって願った通りにはいかないことくらい、キリヤだってわか

っているはずなのに。甘えるなよ、とぼくはこころの中で毒づいた。
「工芸とか人文とか、別のフロアに行っただろ？」

つつけんどんにぼくが言うと、キリヤはひどく息巻いて怒鳴り返してきた。

「それにしたって、なんでそれきり連絡が取れなくなるんだよ。おかしいと思わないのかよ！ 別フロアに移ったって、連絡くらい取れてもいいじゃないか、友達なんだから！」

キリヤは Teppai から借りたというその本を、怒りにまかせてぎりぎりと握った。力を込めるあまり、指が小刻みに震えている。キリヤも誘われたのだろうか、本には『はじめよう！趣味のバンド』とあった。

「あいつは、Teppai は工芸に進むほど手先が器用じゃなかった。運動も苦手だったし、こんなこと言いたくないけど成績はどれも平均より下だった……。だから、心配してたんだ……。あいつには音楽しかなかったんだ！」

それから少し黙ったあと、キリヤは神妙な顔でつぶやいた。

「……殺されたのかもしれない……」

キリヤの突拍子もない言葉とあまりにも真剣な顔に、ぼくは思わず吹きだしていた。

「なにがおかしいんだよ！」

キリヤが怒鳴る。だけど、ぼくは笑いをこらえきれなかった。

「だって、最下層に落とされるっていうならまだしも、殺されるだなんて、そんなの……。ただの噂……っていうか、都市伝説だろ」

ぼくは再び窓の外に目をやった。薄青い空が果てしなく広がり、淡い雲はすぐ目の前をゆったりと流れてゆく。足元を見下ろせば相変わらずどす黒いモヤがかかっていて、地上を垣間見ることさえかなわない。

ぼくらは成長するにしたがって少しずつ階段を上ってきた。今いるのは中階層だ。がんばればがんばるほどぼくらは上に上れて、望めば、雲を見下ろす高階層までたどりつくことも夢じゃない。成績

の悪いやつらは下層に落とされる、陰で殺される……なんていう噂がまことしやかに流れているけれど、それはあくまで噂であって、実際にはそんなことはない。能力なりの階層に落ち着くだけだと、教師も政治家もちゃんと言っている。下層に落とされるのは犯罪者と逃亡者だけなんだ。それなのにキリヤのやつ『殺された』だなんて。噂にまどわされるのもたいがいしろっていうんだ。

「けど、もしなんの取り柄もない人間がいたとしたら、そいつはどうなるんだよ！　どのフロアにも受け入れてもらえないなら、この世界では死んだも同然じゃないのか？」

「なにもできない人間なんていないよ。なにかしらできるさ。単純労働とかさ……」

「テツペイはそんなの望んでなんかいない！」

それきりキリヤは口をつぐんでしまった。

そして、それを最後にぼくと口をきくことはなくなった。

それ以来、キリヤはすっかり変わってしまった。

まず、ほとんど勉強をしなくなった。

それから、反抗的な視線を教師に向けるようになった。

別室で教育しなおす、という理由でたびたび連れ出され、キリヤが部屋に戻ってくることはほとんどなくなった。

キリヤの机の上には、あのテツペイから借りたという本だけがさびしげにほこりをかぶっていた。

ある日、ぼくが授業から戻ってくると、キリヤが部屋にいた。

久しぶりに顔を合わせるキリヤは以前よりかやせて、落ちくぼんだ目をぎらぎらさせていた。

驚いたまなざしを向けるぼくに、キリヤが独り言をいうみたいにつぶやいた。

「おれはここを出るぜ」

ぼくは驚かなかった。なんとなく、そうなるんじゃないかという気はしていた。こいつは、キリヤはもう、このフロアにはいられないだろう。このフロアを追い出されるか、あるいは自分で出ていくかもしれない、と……。

「おまえはこの世界がおかしいかもしれないなんて、これっぽっちも思わないだろうな」

キリヤに、ひどくバカにされたような気がした。それでぼくはつい、心にもないことを口走ってしまった。

「お、思ってるよ。……少しは……」

キリヤが、少し驚いたみたいな顔をしてぼくを見る。

「思うけど……。考えたってどうなるってんだよ。どうにもならない、苦しくなるだけじゃないか。だから考えないようにしてるんだ。なんだよ、ひとりで全部背負ってるみたいな重苦しい顔しちゃってさ。そんな思いしてるのは自分だけだと思ってんのかよ。ぼくのことをなにも感じない鈍感人間みたいに言うなよな」

キリヤは黙った。

「このフロアを出たらどうなるか、だいたいわかってんだろ。脱走なんかしてつかまったら、最下層まで落ちていくだけだ。たぶん、もう二度と戻れない。ほかのフロアにも受け入れられない。せつかく、スタートラインは平等に用意されてるんだぜ。それなのに……」
ぼくにはキリヤのやろうとしていることが理解できなかった。

自分の一生をだいなしにしてまでやることじゃないはずだ。このままであれば、地上を見下ろすことができるこの中階層で、何の心配も不自由もなく勉強したり遊んだりできる。そのあとは能力しただけで、それでもどんな仕事についたって食うに困らない安定した一生を送ることができるのって……。

「おれは考えることをやめない」

キリヤの、意思のこもった強い声が、部屋に静かに響いた。

「そう簡単に、殺されるもんか」

それが、ぼくが聞いたキリヤの最後の言葉だった。

次の朝には、キリヤはもう姿を消していた。

学校ではキリヤの搜索が、生徒たちに気づかれないよう、静かに進められた。

同室のぼくは、当然のごとく、捜査員に呼ばれた。

キリヤ逃亡に手を貸したのではないか、関わっているのではないかと疑われたからだ。

だけど、ぼくはすぐに解放された。

ぼくの体から、睡眠薬が検出されたからだ。

ぼくはすぐにそのことの意味に気づいた。

キリヤがこっそり、ぼくのコーヒーに睡眠薬を入れたんだ。逃亡をぼくに気づかれないように、そしてたぶんぼくに疑いの目が向けられないように。

そしてあの夜、ぼくを眠らせてからキリヤはひっそりこの部屋を出た……。

キリヤのしでかしたことは愚かなことだったと思う。けれどキリヤの放った数々の言葉はその後、ぼくの中に複雑な感情として残った。まるで、こんがらがってほどけそうにない毛糸玉が、胸の奥底に沈んでいるみたいに……。

* * *

それからキリヤがどうなったのか知らないまま、歲月だけが過ぎてゆき、やがて僕は大人になった。

僕は僕的能力に合った進路を勧められたままに進み、そして今、能力に見合った仕事をしている。

「あなた……あなた！」

仕事は決して楽しいわけじゃない。でも、仕事というものはたいがい、楽しいものじゃないし、それに、社会を支える労働者たちには仕事以外の娯楽が充分すぎるほど用意されている。メンタル面でのケアも充実しているから、僕たちは安心して働けるというわけだ。

「目を開けてちょうだい、あなた！……先生、主人は……主人は大丈夫なんでしょうか？」

そうそう、家族にもめぐまれた。

妻と子どもが二人。ひとり目は女の子でふたり目は男の子。

まるで絵に描いたみたいな理想的な家庭で、親も喜んでくれた。

両親は、おまえを生んで育てた甲斐があつたよ、と満足げに笑っていたっけ。

「おめでとうございます、奥さん。これは名誉の殉職ですよ。この国のために働き、そして死ぬるのですから」

安定した就職、幸せな結婚、かわいい子どもたち……。

この国に生きる誰もが思い描く理想の生活。

それを手に入れられたのだから、僕はまちがいなく幸せだ。

「過労死が殉職ですって？ でも……主人はまだ三十代で……。

……。ああ、そうですね。国のために……。わたしたちのために主人は死ぬのですね……。これは喜ぶべきこと……。なのです
ね……………」

「そうです。ご主人はこの国のために懸命に尽くし、倒れました。

これぞ国民の、企業戦士の鏡ですよ。それに奥さん。再婚相手はいくらでもいます。ご主人の替わりはいくらでもいるのです。ご安心なさい。さあ、そろそろ時間です。ご主人の最後をきちんと看取ってあげましょう……」

* * *

そう、僕はまちがいなく幸せなんだ。
それだけは間違いない。
だけど……。

それでも、ふと、むなしさのようなものを感じることがある。
それは、キリヤが僕に残していったあの？こんがらがってほごけない毛糸玉？なのだと気づいたのは、つい最近のことだ。

約束された幸せより、「自由」を選んだキリヤ。

13の頃のキリヤが、ときどき僕に問いかける。

「おまえ、本当にそれでいいのかよ」

……と。

僕は、すぐさまキリヤの声を頭の中から追い出して、自分の言葉で上書きをする。

なに言っているんだ、僕はまちがいなく幸せだ、と。

今思うと、やっぱりあいつは馬鹿で、無謀なやつだった。

あいつは、今、どうしているのだろう。

うまく逃げられたのだろうか。

それとも、空の见えない最下層の世界で……。

いや、もうあいつのことを考えるのはよそう。

疑問を持つことさえしなければ、キリヤも僕みたいに幸せな生活を送れていたのにな。

そうだ。今度の日曜には妻と子どもたちを連れて公園に行こう。
妻の手作りの弁当を持って行って、木陰で食べるんだ。子どもた

ちとはキャッチボールをしたり、噴水で遊んだり……喜ぶ顔が目に見えるようだ。

ほらな、キリヤ。

僕は幸せだろう？

おまえはいまの僕を見て、せせら笑うかもしれない。

でも、おまえがどんなに笑おうと、僕は僕が正しいことを信じて疑うことはないだろう。

そう。信じ、て うた、が うこ と な
ど……、……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084i/>

戦士の一生

2010年10月8日15時14分発行